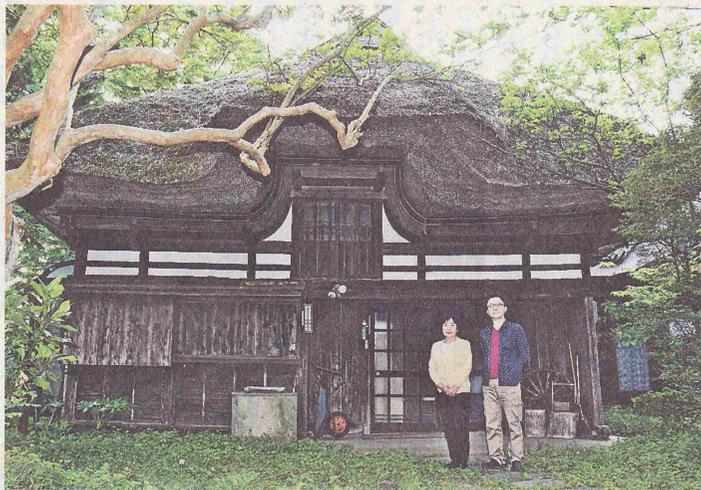


郷土史家・相場信太郎の生家

かやぶき古民家 活用しませんか

秋田市仁井田

住宅街が広がる秋田市仁井田字大野に、同市出身の木版画家・勝平得之(とくし、1904~71年)が描いたかやぶきの古民家が残っている。得之の画業を広く紹介した郷土史家・相場信太郎(のふたろう、12~88年)の生家で、現在は空き家だ。歴史ある建物を後世に残したいと、空き家の活用にあたる市内のNPO法人と、信太郎の孫で所有者の清人さん(48)が利活用する個人・団体を探している。



古民家は木造平屋で、母屋と離れを合わせた床面積は約260平方メートル。6~14畳の部屋が10部屋、土間や蔵もあり、明治時代の建築と伝えられる。敷地面積は約3200平方メートル。

信太郎は、随想の同人誌「叢園(そうえん)」を主宰し、郷土史家として秋田の農村生活や風俗に関する資料を研究。叢園の同人だった得之の画業を世に広め、得之も叢園の表紙絵を手がけるなど、親交が深かった。



相場信太郎

かやぶき古民家の前に立つ相場清人さん(右)ら家族

勝平得之の版画にも

信太郎の著書「村里歳時記」(42年)の表紙絵に得之が描いた家と古民家が似ていたことから、今年に入って、空き家の有効活用に向けた支援にあたる市内のNPO法人「住まい安心サポート秋田」の傳野(でんの)正一副理事長(76)が、得之の作品を収蔵する市立赤れんが郷土館に検証を依頼。得之のスケッチ帳に「仁井田 大野部らく」と記した絵が複数枚あったことや描いた日付、家の特徴などから、村里歳時記の表紙絵と、同じ版木を基にした得之の版画「雪国の春」(64年)は、この古民家をモデルにしたとみて間違いないと判断した。

秋田魁新報に連載した「勝平得之 創作版画の世界」(秋田魁新報社刊)



古民家をモデルに描かれた勝平得之の「雪国の春」①と「村里歳時記」の表紙絵②(いずれも秋田市立赤れんが郷土館蔵。家の前で少女がたたずむ構図でフルカラーの「雪国の春」は、かやぶき屋根の質感などがより細かい

の執筆者で、得之作品に詳しい同館学芸員の加藤隆子さん(64)は「普段は対象物を忠実に描く得之だが、スケッチと比べると横幅が圧縮されている。本の表紙という限られたサイズの中で、建物全体の雰囲気を変えたかったのだろう」と話す。得之が題材にした建物で現存しているものは珍しいという。

古民家は3年前、所有者の清人さんが隣に引っ越し、空き家になった。住まい安心サポート秋田によくと、古民家は損傷が激しく、屋根のふき替えなど修復作業を行わなければ、建物自体の存続が難しくなる可能性がある。専門家に見積もってもらったところ、屋根の修復だけで1千万円近くかかる見込みだという。

清人さんは「まずはこの家の存在を多くの人に知ってもらいたい。協力してくれる人がいれば、一緒に利活用する方法を探りたい」と話している。

古民家の情報は、住まい安心サポート秋田のホームページで公開している。見学などの問い合わせは住まい安心サポート秋田 ☎018・838・4720(火、金曜午後1時半~4時)、メールアドレス info@sa2.jp

(吉田優花)